

## アジア・太平洋地域におけるアメリカの軍事演習

福好 昌治

1. はじめに
2. 日米共同統合演習
3. 陸の日米共同演習
4. 海の日米共同演習
5. 空の日米共同演習
6. リムパック
7. タンデム・スラスト
8. コブラ・ゴールド
9. キャラット
10. コープ・サンダー
11. 最近の演習の特徴

**キーワード：**米軍、米太平洋軍、軍事演習、日米共同演習、キーン・エッジ、キーン・スウォード、オリエン・シールド、フォレスト・ライト、ヤマサクラ、コープ・ノース、リムパック、タンデム・スラスト、コブラ・ゴールド、キャラット、コープ・サンダー

### 1. はじめに

筆者は本誌第24号に掲載された「米太平洋軍の戦略と作戦展開」で、米太平洋軍隷下部隊の作戦行動をくわしく記述した。

それでは作戦行動を終えて帰還した部隊は、何をしているのだろうか。当然、兵員は休暇を

とり、装備は点検・修理される。その後は次の作戦展開に備えて、訓練・演習にはげむということになる。訓練（Training）とは、特定のシナリオを想定せずに、射撃や小規模な部隊の運用といった基本的な技術や行動を練習することであり、演習（Exercise）とは、特定のシナリオを想定して、大規模な部隊の運用を試してみることである。

したがって、演習では現実には発生しそうなシナリオを設定することが望まれる。逆に言うと、演習の内容を見れば、米太平洋軍がどのような活動に重点をおいているか、ということもある程度推測できる。

実際に米太平洋軍は1998年の場合、223個もの演習に参加している。<sup>(1)</sup> ほとんど毎日、どこかで演習をしているような状態だ。

本稿では、太平洋地域でアメリカ軍が実施している代表的な演習をとりあげて、その内容を検討してみる。ただし、米韓共同演習については、べつに在韓米軍に関する原稿を予定しているので、そちらに譲ることにする。

### 2. 日米共同統合演習<sup>(2)</sup>

日米共同演習のなかで、もっとも古くから行

(1) U. S. Pacific Command, "U. S. Pacific Command at a Glance", n. d.

(2) 共同演習（Combined Exercise）とは、複数の国の軍隊が協力しておこなう演習のことで、統合演習 ↗

われていたのは、海上自衛隊と米海軍による海の共同演習である。これは1955年から始まっているが、対潜訓練が中心の小規模なものだった。

日米共同演習が本格化したのは、旧ガイドライン（日米防衛協力のための指針）が策定された1978年以降のことである。同年4月に実施された海の日米共同演習に、はじめて米空母（ミッドウェー）が参加した。航空自衛隊と米空軍の共同演習も、同年11月からはじまった。

80年には、海上自衛隊がリムパック（くわしくは後述）に初参加した。陸上自衛隊と米陸軍の共同演習も81年から正式に開始された。86年からは、陸、海、空3自衛隊と米陸、海、空、海兵4軍のすべてが参加する日米共同統合演習がおこなわれるようになった。<sup>(3)</sup>

日米共同統合演習は毎年1回、秋に実施されており、実動演習の時と指揮所演習の時がある。<sup>(4)</sup> 実動演習は86、92、94、96、98年に実施されており、それ以外の年には、指揮所演習が実施されている。

94年の演習までは、実動演習も指揮所演習もキーン・エッジ（keen Edge）というコードネームでおこなわれていたが、95年の演習からは実動演習をキーン・スウォード（Keen Sword）、指揮所演習をキーン・エッジと呼びわけるようになった。<sup>(5)</sup>

98年のキーン・スウォードは（自衛隊では10統演と呼んでいる。10は平成10年度の意味。米軍側は98年10月から99会計年度になるため、キーン・スウォード99と呼んでいる）、11月2～13日、北海道大演習場、岩手山演習場（岩手県）、大矢野原演習場（熊本県）、霧島演習場（宮崎県と鹿児島県にまたがる）ならびに日本周辺海空域でおこなわれた。参加兵員数は自衛隊が約9440人、米軍が約9950人。<sup>(6)</sup>

このうち岩手山演習場でおこなわれた演習には、自衛隊から第9師団第5普通科連隊（青森）等860人と、米軍から第25軽歩兵師団第27連隊第2大隊（ハワイ）等約600人が参加した。<sup>(7)</sup> この演習はキーン・スウォードの一部としておこなわれたものではあるが、とくに、オリエント・シールド（Orient Shield）というコードネームがついている。このコードネームは陸上自衛隊と米陸軍の共同実動演習につけられる名称で、キーン・スウォードが実施されない年には、オリエント・シールドが独自に実施されている。

98年のオリエント・シールドでは、射撃、爆破、通信、ヘリボーン（ヘリからの降下）といった個別訓練のあと、2泊3日連続で、総合訓練がおこなわれた。この時の様子を自衛隊準機関紙『朝雲』のルポは次のように報じている。

「日米ともに交戦用訓練装置を用い、火器か

ㄨ(Joint Exercise) とは、同一国に属する複数の軍種が協力しておこなう演習のことである。たとえば海上自衛隊と米海軍がおこなう演習は共同演習であり、海上自衛隊と航空自衛隊がおこなう演習は統合演習になる。複数の国の複数の軍種が協力しておこなう演習は、共同統合演習という。

(3) 80年代半ばまでの日米共同演習については、福好昌治「日米共同演習が日本を席卷する」『軍事民論』第49号、1987年7月、77～84ページを参照されたい。

(4) 実際に部隊を動かしておこなうのが実動演習で、部隊を動かさずに指揮所のみを連結して実施するのが、

指揮所演習である。演習場所が制約される実動演習では、シナリオの設定におのずと制約が生じる。指揮所演習の場合は自由にシナリオが設定できるが、指揮官、幕僚だけの演習になり、有事の時に実際に戦う前線部隊の訓練にはならない。つまり、どちらの演習にも一長一短があるわけで、そのためどこの国の軍隊でも、両方の演習を実施している。

(5) HQ PACAF/DOXE Background Paper, 7 Nov. 1996

(6) 自衛隊準機関紙『朝雲』、98年10月22日

(7) 『朝雲』、98年11月19日

ら発射されたレーザーが隊員の身体に当たると、実弾と同様に『死亡、重傷、軽傷』などがコンピュータにより判定され、戦線を離脱させられることから、隊員も必死。これは戦車などの大型装備も同様だ。

各隊員が暗視ゴーグルを装備する米軍は基本的に夜間行動を中心とし、昼間、陸自部隊が状況下、戦闘中でも寝そべて仮眠している者も。米軍は超越交代<sup>(8)</sup>の行動を起こすのは日没後を待ってからと、その徹底ぶりは際立っており、陸自隊員たちも実戦経験豊富な米軍の行動と、暗視ゴーグルからハイテク防寒具、携行食まで、その装備に大いに刺激を受けていたようだ<sup>(9)</sup>。

同演習では、自衛隊のヘリから米兵が降下するといった訓練もおこなわれており、<sup>(10)</sup> 日米の一体化がかなり進んでいることを示している。

大矢野原演習場と霧島演習場では、陸上自衛隊と米海兵隊による共同演習が実施された。両演習場が日米共同演習に使用されたのは初めてだ。従来、日米共同演習に使用されていた5つの大演習場が、沖縄の海兵隊による実弾砲撃訓練場としても使用されるようになったからだ。

この演習もキーン・スウォードの一部ではあるが、とくにフォレスト・ライト (Forest Light) というコードネームが与えられている。オリエント・シールドと同様、キーン・スウォードがおこなわれない年にも、フォレスト・ライトは単独で実施されている。

98年のフォレスト・ライトには、陸自から第

8師団第24歩兵連隊 (宮崎県・えびの) 等約800人、米海兵隊から約600人が参加した。<sup>(11)</sup> 米海兵隊の大部分はハワイから6か月のローテーションで、沖縄に派遣されている第3海兵連隊第3大隊であった。<sup>(12)</sup>

同演習では、射撃、爆破、災害医療救難といった訓練に加えて、NBC (核・生物・化学兵器) 防護訓練もおこなわれた。米海兵隊が汚染環境下での作戦方法を陸自に教え、陸自も自己のNBC防護法を米海兵隊に説明している。<sup>(13)</sup>

海上では、毎年1回おこなわれる海上自衛隊演習 (海演)<sup>(14)</sup> の一部が、日米共同演習として実施された。これには海自からイージス護衛艦みょうこう等8隻、米海軍から空母キティホーク等8隻が参加した。<sup>(15)</sup>

同演習では、対潜戦、防空戦のほか、新ガイドラインで自衛隊の新たな任務とされた洋上給油も実施された。その様子を『朝雲』は以下のように伝えている。

「みょうこうグループはこの時、補給艦はまなを日米の巡洋艦、駆逐艦クラス8隻が車輪状に取り囲むようにして約20ノットで東航していた。各艦の距離は5キロから10キロで、いずれも潜水艦や航空機、ミサイルによる攻撃を警戒。給油時の戦闘艦は速力が落ち、最も無防備になり、攻撃の目標になりやすいからだ。各艦は艦載の対潜ヘリを飛ばし、さらにP3C哨戒機の支援も受け、敵潜水艦の捜索に余念がなかった」<sup>(16)</sup>

(8) 後方にいる部隊が前方にいる部隊を越えて、最前線に進出する戦術行動で、高いレベルの技量を要する。部隊交代の方法には他にその場交代がある。

(9) 『朝雲』、98年11月19日

(10) Sgt. John Giles, USMC, Japan-U.S. Forces Train for Defense: Orient Shield 99, "Asia-Pacific Defense Forum", Summer 1999, p8

(11) 『赤旗』、98年11月6日

(12) Staff Sgt. Matt Hevezi, USMC, Japan-U. S. Forces Train for Defense: Forest Light 99, "Asia-Pacific Defense Forum", Summer 1999, pp14-15

(13) ibid., pp16-17

(14) 「海上自衛隊演習」は普通名詞ではなく固有名詞である。米海軍では Annualex と呼んでいる。

(15) 『朝雲』、98年11月19日

(16) 同上

洋上給油は約30分で終了した。周辺事態法では、自衛隊による米軍への後方地域支援は安全なところでおこなうとされているが、この演習では、敵の攻撃があり得ることを前提にして実施されている。国会と現場では、かなり認識のギャップがあるようだ。

キーン・スウォードのなかの航空自衛隊と米空軍による共同演習部分には、特別のコードネームはついていない。これには航空自衛隊からF-15戦闘機等約100機、米空軍からF-15戦闘機（嘉手納）、F-16戦闘機（三沢、群山）<sup>(17)</sup>、C-130輸送機（横田）、KC-135空中給油機（嘉手納）、E-3B早期警戒管制機（嘉手納）、B-1B戦略爆撃機（所属の米本土アイダホ州マウンテン・ホーム基地からグアムのアンダーセン基地に移動し、そこから演習空域に展開した）等約60機が参加した。<sup>(18)</sup>

同演習では、戦闘機戦闘訓練からはじまって、敵防空網制圧（SEAD）や陸上自衛隊の支援を得ての近接航空支援等がおこなわれた。<sup>(19)</sup>

なお、キーン・スウォード終了後の11月15日、硫黄島で自衛隊のみによる統合演習がおこなわれた。<sup>(20)</sup>

### 3. 陸の日米共同演習

陸上自衛隊と米陸軍による共同演習としては、毎年、指揮所演習ヤマサクラ（Yamasakura）が2回、陸自と米陸軍による実動演習オリエン・シールドが1回、陸自と米海兵隊による実

動演習フォレスト・ライトが1回、陸自と米陸軍、陸自と米海兵隊による積雪寒冷地演習が各1回、恒例行事のように開催されている。

ヤマサクラは日本とアメリカで交互に開催されており、ヤマサクラ35は99年1月、朝霞駐屯地（埼玉県）で6日間にわたり開催された。陸自からは東部方面隊を中心とする約2000人、米陸軍からは米本土ワシントン州フォートルイスの第1軍団司令部等から約1100人が参加した。<sup>(21)</sup>

演習では、駐屯地内の体育館やグラウンドに設置された天幕の中に、CBS（軍団戦闘シミュレーション）というコンピューターによるシミュレーション・システムが設置され、これを使って部隊の運用が画面上で行われた。このシミュレーションは通信衛星を使って、フォートルイス駐屯地に送られ、ここでも約800人の米兵がヤマサクラ35に参加した。<sup>(22)</sup> 指揮所演習では、こうした通信衛星を介したコンピューター・シミュレーションが、今では主流になっている。

最新のヤマサクラ36は99年6月、ハワイのフォート・シャフター駐屯地で開催されている。<sup>(23)</sup>

米陸軍との積雪寒冷地演習および米海兵隊との積雪寒冷地演習は、ともに99年2～3月、北海道大演習場等で実施された。

### 4. 海の日米共同演習

海上自衛隊と米海軍による共同演習としては、例年、対潜演習が年4～5回、掃海訓練が年2

(17) 日米共同演習への在韓米空軍機の参加は、97年に次いで2回目という報道があるが、86年の第1回キーン・エッジに、烏山基地（韓国）所属のA-10攻撃機が参加している。

(18) 『朝雲』、98年10月22日；“Pacific Stars and Stripes”，November 8 1998，

(19) Misawa Base News Paper，“Northern Light”，

November 13 1998

(20) 自衛隊では初の統合演習と報道されているが、81年に対馬で自衛隊のみによる統合演習が実施されている。

(21) 『朝雲』、99年1月28日

(22) 「カラーグラビア YAMASAKURA」『軍事研究』、99年4月

(23) 『朝雲』、99年7月22日

回、小規模特別訓練<sup>(24)</sup> が年 1 回、海上自衛隊演習（海演）の一部として実施される日米共同演習が年 1 回、指揮所訓練が年 1 回、衛生訓練が年 1 回おこなわれている。<sup>(25)</sup>

このうち、衛生訓練は大規模災害等による大量の負傷者の発生を想定した訓練で、96年度から新たに実施されるようになった。99年 3 月 3 日に米軍横須賀基地で実施された訓練は、台風による大規模災害の発生を想定しておこなわれ、日米共同による負傷者の搬送等を訓練した。<sup>(26)</sup>

防衛庁が衆議院予算委員会提出資料や『防衛白書』等で公表している海の日米共同演習は、以上のとおりであるが、これだけなのか疑問が残る。というのは、米軍の資料とデータが異なっているからだ。

防衛庁の資料では、97年に実施された海の日米共同演習は、対潜訓練 5 回、掃海訓練 3 回、指揮所演習 1 回、小規模訓練 1 回となっている。<sup>(27)</sup>

ところが、筆者が米情報公開法に基づいて入手した米太平洋艦隊の年次業務報告書（97年版、極秘指定解除文書）を見ると、97年 1～12月に、対潜戦演習として、日本とともに SHIN KAME というコードネームの演習を 4 回、ASWEX というコードネームの演習を 3 回、DIESELEX というコードネームの演習を 4 回、SHAREM というコードネームの演習を 2 回、実施した、と記述されている。<sup>(28)</sup>

さらに、同期間、日本とともに MINEX／EODX（機雷／爆発物処理演習）を一回実施

した、とも書かれている。<sup>(29)</sup>

機雷戦演習の回数はなぜか防衛庁の発表より少ないが、対潜戦演習の回数は防衛庁の発表よりかなり多い。

日米間のデータの違いがなぜ生じているのかという点は不明だが、防衛庁が発表していない海の日米共同演習が実施されている可能性は排除できない。

最近おこなわれた海の日米共同演習では、7 月 11～14 日、呉沖で、海自の輸送艦おすみと米海軍のドック型揚陸艦フォート・マクヘンリー（母港・佐世保）による初の共同輸送訓練が目される。

同訓練では、両艦に搭載されている LCAC（エア・クッション型揚陸艇）や海自の HSS-2B 対潜ヘリを使った輸送訓練等が実施された。この訓練は大規模災害時の被災者救出を想定したものだ。<sup>(30)</sup>

## 5. 空の日米共同演習

空の日米共同演習としては、毎年、防空戦闘訓練、戦闘機戦闘訓練、再発進準備訓練、救難訓練を一緒におこなう実動演習が年 3 回程度実施されている（そのうち 1 回は空自最大のイベントである航空総隊総演の一部として実施されている）。指揮所演習が実施される年もある。<sup>(31)</sup>

空の日米共同演習に対して、米空軍はコープ・ノース（Cope North）というコードネームをつけていることが多いが、99年 2 月 15～26 日、

(24) 海自の旗艦と米第七艦隊旗艦との間で、日本周辺海域を移動しながらおこなわれる小規模な訓練。

(25) 防衛庁、衆議院予算委員会提出資料、各年版

(26) 『海上自衛新聞』、99年 2 月 26 日、Yokosuka Base News Paper, “Seahawk”, March 12 1999

(27) 防衛庁、衆議院予算委員会提出資料、98年版

(28) Pacific Fleet, “Pacific Fleet Command History,

January 1-December 31 1997”, 1998, p68

(29) *ibid.*, p69

(30) NWS (Navy Wire Service) 22 jul-5, “USS Fort McHenry Completes LCAC exercise with Japanese Navy”, July 22 1999

(31) 防衛庁、衆議院予算委員会要求資料、各年版



九州や四国沖で実施されたコープ・ノース99-2には、戦闘機や早期警戒管制機等ともに、米空軍のRC-135電子偵察機1機も参加した。<sup>(32)</sup> 電子戦訓練がおこなわれたのであろう。

99年6月21～25日には、ゲームでコープ・ノース・ゲーム99が実施された。空自が海外で日米共同演習をおこなうのは、これがはじめてである。空自から派遣されたのは、F-15J/DJ戦闘機6機(百里)とE-2C早期警戒機2機(三沢)。米空軍からは、F-15C戦闘機6機(嘉手納)、E-3B早期警戒管制機1機(嘉手納)が参加した。<sup>(33)</sup>

空自がゲームで演習を実施することにしたのは、日本周辺の狭い訓練空域と違って、訓練環境がよいからだ。この点について、派遣部隊の指揮官に指名された岩崎茂1佐は、「ゲームでは日本に比べて訓練空域が格段に広いことと、電波の制限が少ないので、敵のレーダーから逃れる訓練など、より高度な電子戦環境下での訓練が可能。さらに、基地から訓練空域が近いので、燃料のほとんどを戦闘訓練に使うことができ、F-15の持つ性能を最大限に発揮することができる」と指摘している。<sup>(34)</sup>

同演習では、戦闘機戦闘訓練、電子戦環境下での防空戦闘訓練、再発進準備訓練等がおこなわれたが、このなかで日米のF-15整備員同士によるクロス・メインテナンス(空自の整備員が米軍F-15の整備をおこない、米空軍の整備員が空自F-15の整備をおこなう)が、はじめ

て実施された。新ガイドラインでは、米軍に対する後方地域支援のひとつとして整備が挙がっており、今回のクロス・メインテナンスはこれを念頭においたものであろう。<sup>(35)</sup>

新ガイドラインとの関連では、99年7月12～15日に沖縄で実施された空自と米空軍による共同救難訓練にも注目すべきだ。救難訓練自体は毎年実施されてきたが、夜間の負傷者救出を想定したのは、今回がはじめてである。<sup>(36)</sup> 新ガイドラインで、後方地域搜索救難が自衛隊の任務とされたことを反映しているのであろう。

## 6. リムパック

リムパック(RIMPAC, Rim of the Pacific)は、米海軍第3艦隊<sup>(37)</sup>の主催により、ハワイ周辺海域等で、2年に1回、開催されている多国間演習である。参加国は年によって若干異なるが、リムパック98では、アメリカの他に、日本、カナダ、オーストラリア、韓国、チリが参加した(この他、中国、タイ、メキシコ、エクアドル、ペルーがオブザーバーを派遣している)。<sup>(38)</sup> 海上自衛隊は80年から毎回参加している。<sup>(39)</sup>

リムパック98は98年7月6日から8月6日にかけて、ハワイ周辺海域で実施された。全体の参加兵員数は約25000人、艦船は50隻以上、航空機は200機以上。このうち空母は米海軍のカールビンソンのみだった。<sup>(40)</sup>

(32) Misawa Base News Paper, "Northern Light", February 19 1999

(33) U. S. Air Force News Release, "U. S. trains with Japan in Exercise Cope North Guam 99", June 22 1999

(34) 『朝雲』、1999年7月1日

(35) 『航空情報』、1999年9月、2～8ページ

(36) 『琉球新報』、1999年7月15日

(37) 米海軍には第2、3、5、6、7という5つのナンバー艦隊があり、第3艦隊は東太平洋を担当している。

(38) RIMPAC98-Press Release 21, "Non-Participatory Nations Observe RIMPAC Exercise", July 17 1998

(39) 96年までのリムパックについては、福好昌治「日米韓軍事体制の強化 リムパック96」『統一評論』、96年8月、36～43ページを参照されたい。

海上自衛隊は護衛艦4隻、潜水艦1隻、補給艦1隻、P-3C哨戒機5機を派遣している。<sup>(41)</sup> 参加戦力数はアメリカに次いで2番目である。

韓国海軍は90年から参加しており、リムパック98には、フリゲイト2隻、潜水艦1隻、P-3C哨戒機2機を派遣した。<sup>(42)</sup>

リムパック98のシナリオでは、小さいが観光と貿易で比較的豊かな民主主義国ブルーランドと、大きいが独裁政権で経済力の弱い農業国オレンジランドという仮定の国が2つ設定された。

ブルーランドは太平洋における重要な空輸、海上輸送拠点であるが、州兵と沿岸警備隊しか保有しておらず、反乱や災害には脆弱であった。一方のオレンジランドは大規模な兵力と大量の攻撃機、戦闘機を保有していた。

ある日、オレンジランドがブルーランドを攻撃したため、国連はオレンジランドに対する制裁を決議し、同地域を安定化させるため、多国籍海軍が派遣されることになった。米空母カールビンソンもブルーランドを支援するために、出動命令を受けた。<sup>(43)</sup>

シナリオの進展につれて、米海兵隊の13MEU (Marine Expeditionary Unit, 海兵遠征隊) が投入され、食糧、医療援助等の人道的救援活動をおこなった。さらに、13MEUはアメリカ市民の救出もおこなった。<sup>(44)</sup>

リムパックは海軍中心の演習であるが、リムパック98では、米空軍も第347AEG (Air

Expeditionary Group、航空遠征群) を編成して参加した。第347AEGを構成しているのは、F-16戦闘機、E-3早期警戒管制機、B-52戦略爆撃機、B-1B戦略爆撃機等である。<sup>(45)</sup>

B-52とB-1Bは、米海兵隊と米海軍特殊部隊SEAL (Sea Air and Land) による上陸演習のさいに、援護射撃をおこなった。F-16やE-3は仮設敵側を演じた。<sup>(46)</sup>

以上が公開資料にもとづくリムパック98の概要であるが、主催者である米海軍第3艦隊はリムパック98をどのように総括しているのだろうか。

この点に関して、筆者は米情報公開法にもとづいて『リムパック・ポスト・エクササイズ・レポート』と題する米第3艦隊の資料を入手した。これは演習の総括文書である。そこでは、まず重要な達成項目が列記されており、その中に以下のような記述がある。

「共通の作戦指揮官 以前のリムパックとは違う重要な変化は、2国間部隊(引用者注、日米)と多国間部隊(引用者注、米、韓、カナダ、オーストラリア、チリ)ともに、共通の敵に対して、共通の目標をもって行動した、という点である。両部隊とも単一の作戦指揮官のもとにおかれた」<sup>(47)</sup>

日本国憲法第9条は集団的自衛権の行使を禁止しているという政府の解釈によって、自衛隊と米軍はそれぞれの指揮官の指揮下におかれ、両指揮官は対等な関係にある(このような関係

↘ (40) RIMPAC98-Press Release, "RIMPAC98 Fact Sheet", n. d.

(41) 防衛庁のプレスリリース、「RIMPAC98への参加について」、98年6月26日

(42) op. cit., "RIMPAC98 Fact Sheet"

(43) RIMPAC98-Press Release 26, "RIMPAC Missiles in on Real Life Scenarios", July 22 1998

(44) RIMPAC98-Press Release 25, "Marine Land in

RIMPAC", July 22 1998

(45) Air Force News, "RIMPAC bring more expeditionary airpower to the Pacific", August 3 1998

(46) RIMPAC98-Press Release 32, "U. S. Air Force Participates in RIMPAC98 Exercise", August 4 1998

(47) Commander Third Fleet, "RIMPAC98 Post Exercise Report", n. d., ppl-2

を調整関係と言う)というのが建前となっているが、実際の演習では、そうではおらず、単一の指揮官のもとにすべての参加部隊がおかれているのだ。

同資料では、船舶検査活動が実施されたことも記述されている。<sup>(48)</sup> 海上自衛隊も当初はこれに参加する予定だったが、周辺事態法が成立する前だったため、リムパック98期間中の参加はとりやめた。しかし、横須賀からハワイへ向かう途中に、米海軍のフリゲイト・バンデグリフトと船舶検査訓練を実施していたという。<sup>(49)</sup>

リムパックでも冷戦時代と違って、人道的援助、非戦闘員の救出作戦、船舶検査活動といった非戦闘作戦の割合が増えている。

## 7. タンデム・スラスト

タンデム・スラスト (Tandem Thrust) は当初、米軍単独の演習として、92年にはじまった。第1回目は南カリフォルニア沖で実施され、第2回目の93年は、グアム、北マリアナ諸島でおこなわれた。

オーストラリア軍が参加して、米豪共同演習となったのは、95年からである。この年はマリアナ諸島で実施され、米第7艦隊司令官が米豪連合軍の指揮官になった。

97年のタンデム・スラストはオーストラリア・クイーンズランド州のショール・ウォーター・ベイ訓練海空域で実施された。

98年は実施されず、99年のタンデム・スラスト

は、再びグアム周辺でおこなわれた。<sup>(50)</sup> こうした経緯を経て、タンデム・スラストは最大の米豪共同演習となったのである。

タンデム・スラスト99は99年3月15日～4月4日に実施され、前半の3月15日～22日には、指揮所演習がおこなわれ、後半の3月26日～4月4日に、実動演習がおこなわれた。<sup>(51)</sup>

最大の参加部隊は米海軍で、兵員8000人、艦船12隻、航空機74機を派遣した。このなかには、空母キティホーク、第7艦隊指揮艦ブルーリッジ等、横須賀を母港とする艦船7隻と、佐世保を母港とするドック型揚陸艦フォート・マクヘンリーも含まれている。<sup>(52)</sup>

米空軍は兵員700人とF-15E戦闘機12機(アラスカ・エルメンドルフ)、E-3早期警戒管制機1機(同)、B-52戦略爆撃機2機(米本土ルイジアナ州バークスデール)、KC-135空中給油機2機(嘉手納)等を派遣した。<sup>(53)</sup>

米海兵隊の参加兵力は兵員859人、航空機14機で、このなかにはF/A-18戦闘攻撃機10機(岩国)等が含まれている。<sup>(54)</sup> 当初は沖縄の31MEUも参加する予定だったが、98年11月、急速ペルシャ湾へ派遣されることになったため、沖縄からの参加は、300人(海軍特殊部隊SEALを含む)にとどまった。<sup>(55)</sup>

米陸軍もアラスカ州アンカレッジに駐屯している第17歩兵連隊第1大隊や、ハワイに駐屯している第45軍団支援群等955人を参加させた。<sup>(56)</sup>

米軍のカウンターパートとなるオーストラリア軍は艦船4隻、航空機3機、兵員1100人を参

(48) ibid., pp13-14

(49) 『朝日新聞』、1998年8月7日

(50) U. S. Navy 7th Fleet Press Release, "Tandem Thrust 99 to be held in Guam", n. d.

(51) ibid.

(52) U. S. Navy 7th Fleet Press Release, "U. S. Navy", n. d.

(53) U. S. Navy 7th Fleet Press Release, "U. S. Air Force", n. d.

(54) U. S. Navy 7th Fleet Press Release, "U. S. Marine Corps", n. d.

(55) Pacific Stars and Stripes, March 28 1999

(56) U. S. Navy 7th Fleet Press Release, "U. S. Army", n. d.



加させた。加えて、タンデム・スラスト99には、カナダ軍も艦船3隻、航空機1機、兵員750人を派遣している。<sup>(57)</sup>

シナリオとしては、ケプアおよびアルランという架空の島国が設定された。両国は歴史的な対立感情を抱いており、その対立が頂点に達したとき、独裁国ケプランがアルランに攻撃をかけた。これに対し、米豪連合軍がアルランを支援するために派遣された。同軍はブルーリッジの指揮で、アルランにいる両国の非戦闘員を救出する作戦を実施した。この際、カナダ軍は米陸軍とともに、仮設敵部隊を演じた。<sup>(58)</sup> タンデム・スラストでも、大規模な戦争ではなく、小規模紛争が想定され、非戦闘員の救出作戦といったものが重視されるようになったのである。

なお、タンデム・スラスト実施期間中の3月19～25日、タンデム・スラストとは別の訓練という形でアメリカ、オーストラリア、カナダ、シンガポール、韓国による多国間訓練演習(Multinational Training Exercise)が実施された。<sup>(59)</sup> 内容は除籍された米巡洋艦オクラホマシティを標的にした射撃訓練であった。これには三沢のP-3C哨戒機も参加した。<sup>(60)</sup>

## 8. コブラ・ゴールド

コブラ・ゴールド(Cobra Gold)は81年から毎年1回、タイで実施されている米タイ共同演習である。

98年5月20日～6月1日におこなわれた17回目のコブラ・ゴールドには、米軍10000人、タ

イ軍6200人が参加した。<sup>(61)</sup> 米韓共同演習チーム・スピリットが94年以降、中断状態にあるため、今ではコブラ・ゴールドが太平洋地域で最大規模(兵員数)の演習になっている。

コブラ・ゴールド98の前半では、指揮所演習と、後半におこなわれる実動演習に備えた個人／小規模部隊の訓練が実施された。

後半に実施された実動訓練のハイライトは、ハッタオ・ビーチでおこなわれた米タイ共同実弾射撃演習(Combined Arms Live Fire Exercise)であった。同演習では実弾射撃をとまなう上陸演習がおこなわれた。まず、米海軍特殊部隊SEALによる上陸地点の偵察がおこなわれ、次いで、強襲揚陸艦ペローウッドとドック型揚陸艦ジャーマンタウン(いずれも母港は佐世保)から米海兵隊が上陸作戦を敢行した。同時に、空からタイ軍の空挺部隊が降下し、上陸作戦を成功させた。<sup>(62)</sup>

実動演習の期間には、タイ空軍のコラット基地を出撃拠点にして、米海兵隊のF/A-18戦闘攻撃機とタイ空軍のF-16戦闘機による空中戦訓練もおこなわれた。

タイ南部では、米海兵隊第7海兵連隊第1大隊とタイ海兵隊による実弾射撃訓練も実施されている。さらに、両国の海兵隊は偵察進入訓練やジャングルでのサバイバル訓練もおこなった。<sup>(63)</sup>

コブラ・ゴールドでは、戦闘訓練だけがおこなわれるわけではない。毎年、コブラ・ゴールドで実施されていることだが、タイ国民に対する民生支援活動も実施されている。コブラ・ゴ

(57) U. S. Navy 7th Fleet Press Release, "Forces", n. d.

(58) U. S. Navy 7th Fleet Press Release, "Scenario", n. d.

(59) U. S. Navy 7th Fleet Press Release, "FAQ", n. d.

(60) "Pacific Stars and Stripes", March 27 1999

(61) LCpl. Abigail B. LaBin, USMC, 17th Annual COBRA GOLD in Thailand, "Asia Pacific Defense Forum", Winter 1998/1999, p15

(62) ibid., pp16-19

(63) ibid., p23

ルド98では、米海軍建設隊、米海兵隊の工兵、タイ海兵隊の工兵によって学校の建設等がおこなわれた。これは工兵民事プロジェクト (Engineering Civic Action Projects) と呼ばれる活動である。

米タイ両軍の軍医、衛生隊はタイ住民に対する医療援助をおこなった。これは医療民事プロジェクト (Medical Civic Action Project) と呼ばれる活動である。<sup>(64)</sup> このような民生支援活動は、第3世界で演習をおこなう際には欠かせない。有事に備えて、軍と民間人との関係を良好なものにしておくのが、その目的だ。

コブラ・ゴールド99は99年5月12～25日におこなわれた。参加兵力は米軍17000人、タイ軍5000人であった。在日米軍からは沖縄の海兵隊1500～2000人が、佐世保を母港とするドック型揚陸輸送艦ダビューク、ドック型揚陸艦フォートマクヘンリーに乗艦して参加した。さらに、横須賀を母港とするフリゲイト・モービルベイとフリゲイト・バンデグリフトも参加した。当初は、同じく横須賀を母港とする空母キティホークも参加する予定であったが、急遽ペルシャ湾に出動することになったため、参加を取り止めている。<sup>(65)</sup>

同演習では、米海兵隊のF/A-18戦闘攻撃機とタイ空軍のF-16戦闘機による空中戦訓練、米海軍とタイ海軍による海上作戦、米タイ両国の陸軍および特殊部隊による野外訓練が実施された。<sup>(66)</sup> 98年と同様に、米タイ両国の海兵隊によるヘリボン訓練もおこなわれた。<sup>(67)</sup>

例年同様、工兵や軍医、衛生隊による支援プログラムも遂行され、農村地域で多目的ビルを建てたり、住民の病気治療等に取り組んだ。<sup>(68)</sup> こうした軍隊による民生支援活動は、コブラ・ゴールドでは欠かせない内容になっている。

## 9. キャラット

キャラット (Cooperation Afloat Readiness and Training, CARAT) は米海軍、海兵隊が東南アジア諸国の海軍とともに実施している演習である。ただし、多国間演習ではなく、米軍が東南アジア諸国を順にまわりながら、それぞれの国の海軍と2国間で実施している。主催は米太平洋艦隊で、米第7艦隊がスケジュールを決め、シンガポールに配備されている米海軍の西太平洋兵站群 (Commander, Logistic Group Western Pacific) が全般的な調整をおこなっている。<sup>(69)</sup>

米軍がキャラットを実施する目的は、①作戦計画立案、指揮・統制、戦術、広報、部外連絡、兵站支援、医療、工兵民生支援プログラムといった分野における2国間のインターオペラビリティ (相互運用性) を促進すること、②東南アジア諸国軍との友好関係をきずくこと、③アジア太平洋地域における米軍のプレゼンス (存在誇示) を維持することによって、地域の安定、繁栄、安全を強化すること、④米軍の作戦即応態勢と能力を示すこと——とされている。<sup>(70)</sup>

(64) *ibid.*, p23

(65) "Pacific Stars and Stripes", April 29 1999, May 13 1999

(66) 36th Air Base Wing Public Affairs, "Joint Forces Attack Cobra Gold Exercise", May 26 1999

(67) Marine Corps News, "Thai, U. S. Marine Unite During Hero Operation", May 28 1999

(68) "Pacific Stars and Stripes", May 23 1999

(69) Lt. Commander Cate Mueller, USN, CARAT : Bilateral Naval Exercises in Southeast Asia, "Asia Pacific Defense Forum", Winter 1998/1999 Special Supplement, p2

(70) *ibid.*, p6

キャラットは95年から毎年1回開催されており、キャラット98は98年5月12日～8月5日に、ブルネイ、マレーシア、フィリピン、タイ、シンガポールとの間で実施された。<sup>(71)</sup>

キャラット98には、横須賀を母港とする巡洋艦モービルベイ、佐世保を母港とするドック型揚陸艦フォート・マクヘンリーのほか、フリゲイト・サイド（母港はサンジェゴ）、潜水艦ヒューストン（同）、潜水艦ジェファーソン・シティ（同）、救難艦サルバー（パールハーバー）、嘉手納に駐留しているP-3C哨戒機、それに海軍特殊作戦軍に所属する哨戒艇モンスーンとハリケーン（ともにサンジェゴ）が参加した。米軍の参加兵員数は1700人で、これには沖縄の海兵隊、海軍建設大隊、海軍特殊部隊SEAL等が含まれている。<sup>(72)</sup>

演習の内容としては、戦術機動、対潜戦、防空戦、上陸作戦、実弾射撃訓練から徒手格闘術の訓練まで幅広くおこなわれた。とくに、マレーシアでは、マレーシア海軍の艦船に米海兵隊の水陸両用強襲車両を搭載して、上陸作戦が実施された。<sup>(73)</sup>

演習では、当然米軍が東南アジア諸国軍を指導することが多いのだが、逆のケースもある。マレーシアでは、マレーシア軍が米軍にジャングル戦を教えている。<sup>(74)</sup>

キャラット99は99年6～8月に実施された。

99年の米軍参加部隊は例年と異なり、在日米軍ではなく、米本土やハワイの部隊が中心になっている。99年前半、横須賀を母港とする艦船等がベルシャ湾に派遣されていたことなどの理由で、キャラット99にまで派遣できなかったからであろう（乗員に休暇を与えたり、艦船の整備をしなければならない）。

米軍の参加艦船はフリゲイト・ゲリー、フリゲイト・ジョージ・フィリップ、ドック型揚陸艦コムストック（以上、母港はサンジェゴ）、ドック型揚陸艦フレデリック（パールハーバー）で、沖縄の海兵隊が揚陸艦に乗り込んだ。さらに、沖縄に配備されている標的発射分遣隊、ゲームに配備されている爆発物処理隊、パールハーバーに配備されている移動救難隊等も参加している。<sup>(75)</sup> 米軍の参加兵員数は1500人である。<sup>(76)</sup>

東南アジア側の参加国はマレーシア、シンガポール、タイ、インドネシアで、各国との間で対潜戦、防空戦、上陸作戦、沿岸での水中戦、救難訓練、兵站支援訓練等が実施された。加えて、例年同様、各種の民生支援プロジェクトも実施された。<sup>(77)</sup>

## 10. コープ・サンダー

コープ・サンダー（Cope Thunder）は米太平洋空軍の主催により、アラスカで開催されて

(71) このうちフィリピンには寄港していない。これは当時、米軍地位協定（Visiting Forces Agreement）が締結されていなかったからである。フィリピンの近海で、米海軍のフリゲイト・モービルベイとフィリピン海軍が小規模の訓練をおこなっただけである。当初はインドネシアともキャラットをおこなう予定であったが、反スハルト運動の高揚に配慮して中止された。

(72) op. cit., "Asia Pacific Defense Forum", Winter 1998/1999 Special Supplement, pp3-5

(73) Okinawa Marine News Paper, "Okinawa Marine", August 7 1998

(74) op. cit., "Asia Pacific Defense Forum", Winter 1998/1999 Special Supplement, p9

(75) Commander Logistic Group Western Pacific, "CARAT Task Force Set for Series of Bilateral Exercises in Southeast Asia", n. d.

(76) Commander Logistic Group Western Pacific, "Thai School Children, Medical Clinics Benefit from CARAT99 COMREL Efforts", n. d.

(77) op. cit., "CARAT Task Force Set for Series of Bilateral Exercises in Southeast Asia"

いる多国間演習である。76年に開始され、91年まではフィリピンのクラーク基地とそこに隣接したクローバレー射爆場で実施されていた。ところが、91年に発生したピナツボ火山の噴火によって、クラーク基地が使用できなくなったため、アラスカに移転することになった。フィリピンと同様、アラスカにも、実弾爆撃を可能とする広大な訓練空域があるからだ。アラスカでは、エルメンドルフ基地とイールソン基地が出撃拠点として使われている。<sup>(78)</sup>

コープ・サンダーでは、防衛部隊“レッド”、攻撃部隊“ブルー”、中立部隊“ホワイト”に参加部隊を分けて、地対空の戦いが繰り広げられる。<sup>(79)</sup>

コープ・サンダーは年4回実施されており、98年7月13～24日に実施されたコープ・サンダー98-4には、米軍900人、その他の国から350人が参加した。<sup>(80)</sup> 米国以外の参加国は日本、イギリス、オーストラリア、シンガポールである。さらに、ブルネイ、マレーシア、タイ、中国もオブザーバーを派遣している。<sup>(81)</sup>

米軍の参加部隊のなかには、嘉手納基地に配備されているF-16戦闘機6機、KC-135空中給油機2機、兵員125人も含まれている。<sup>(82)</sup>

航空自衛隊も96年から年1回、コープ・サンダーに参加している。コープ・サンダー98-4に派遣されたのは、C-130輸送機3機、携帯SAM（地対空ミサイル）6セット、兵員107

名。戦術輸送訓練や携帯SAMによる防空戦訓練、米空軍の早期警戒管制機（AWACS）への同乗等をおこなった。<sup>(83)</sup>

99年のコープ・サンダー99-4は、99年7月8～23日に開催された。参加国は米国、日本、シンガポール、タイの4か国で、航空自衛隊はC-130輸送機3機、携帯SAM6セット、兵員97人を派遣した。<sup>(84)</sup>

今回の演習では、地対空戦のみならず、戦闘捜索救難訓練も実施された。これは単なる捜索救難ではなく、敵の支配地域内で遭難した味方の兵員を救出する作戦で、敵との戦闘をも想定している。具体的には、敵に撃墜され、パラシュートで脱出したパイロットを救出するという想定でおこなわれた。救出作戦には米海軍のHH-60H救難ヘリ2機が使用され、そのうち1機が地上に着陸し、もう1機が上空でホバリング（空中停止）しながら待機した。さらに、敵の攻撃に備えて、米空軍のA-10攻撃機がエアカバーを提供した。<sup>(85)</sup>

同演習では、大規模な航空機事故を想定した医療救難訓練や非戦闘員の救出作戦も実施された。<sup>(86)</sup>

## 11. 最近の演習の特徴

最後に以上のような具体例をもとに、最近の演習の特徴をまとめておこう。

(78) 354th Fighter Wing Public Affairs, “Cope Thunder Fact Sheet”, n. d.

(79) *ibid.*,

(80) 354th Fighter Wing Public Affairs, “Five Nation’s Air Forces Strike Alaska for Cooperative COPE THUNDER ‘98”, n. d.

(81) 1st Lt. Kristofer Gifford, USAF, and Tsget Angel Newman, USAF, “Cooperative COPE THUNDER : Asia-Pacific Air Forces in Alaska”, “Asia Pacific Defense Forum”, Spring 1999, p22

(82) “Pacific Stars and Stripes”, July 15 1999

(83) 空幕広報室『お知らせ COPETHUNDER98-4への参加について』、98年7月1日

(84) 『朝雲』、1999年7月1日

(85) 354th Fighter Wing Public Affairs, “Cooperative Cope Thunder Units Train To Rescue Downed Pilot”, July 21 1999

(86) 354th Fighter Wing Public Affairs, “Eight-Nations Cooperative Exercise Kicks Off”, July 16 1999

①旧ソ連軍のような大規模な部隊との戦いを想定したシナリオは少なくなり、小規模な地域紛争が想定されるようになった。冷戦が終結したのだから、当然のことである。今では、米太平洋軍とロシア太平洋艦隊との間でコーポレーション・フロム・ザ・シー（Cooperation From the Sea）という人道援助訓練が、ほぼ年1回定期的に実施されるまでになっており、<sup>(87)</sup> 中国も米軍主催の演習にオブザーバーを派遣するようになった。

②内容面でも、非戦闘員の救出作戦や搜索救難といった戦闘以外の軍事作戦（Military Operation Other Than War）の占める比率がだんだん増えている。これは米軍の任務が多様化しつつあることの反映でもあろう。<sup>(88)</sup>

③日米共同演習においては、新ガイドライン（日米防衛協力のための指針）や新防衛計画の大綱の内容を反映した演習が多くなっている。その点は、米軍の洋上給油が演習のハイライト

になっていること、夜間の搜索救難訓練が実施されたこと、戦闘機の整備員同士によるクロス・メンテナンスが実施されたこと、大規模災害を想定した救援訓練が実施されていることなどにうかがえる。

④自衛隊の演習参加地域も広がっている。海上自衛隊は80年から海外での共同演習に参加しているが、近年、航空自衛隊もグアムやアラスカでの共同演習に参加するようになった。空中給油機を保有することになれば、戦闘機もアラスカでのコープ・サンダーに参加するようになるだろう。日本国内では、訓練空域が狭いために実施できないような訓練もできるようになるわけだ。

国際軍事情勢の変化につれて、米軍の演習内容も変わってきているのだ（自衛隊の演習参加地域の広がりに関しては、国内政治情勢の変化も大きい）。

（99年8月20日現在）

(87) "Okinawa Marine", August 14 1998

(88) 米軍の任務の多様化については、福好昌治「軍隊の任務は変わったのか——軍隊の脱軍事化のはじまり？」

『東アジア研究』、第22号、1998年11月、53～66ページを参照されたい。



